

WLAC REPORT 2020

World Liberal Arts Center Report



名古屋外国語大学
ワールドリベラルアーツセンター長
亀山 郁夫 (学長)

巻頭言

ここに名古屋外国語大学ワールドリベラルアーツセンターの活動報告書「WLAC REPORT 2020」をお届けします。

2015年に発足した本センターは、日本を含む世界のさまざまな地域の言語、文化、芸術、教育、社会、政治等に関わる問題系を掘り起こし、21世紀の現代に真にふさわしい教養教育の理念構築に寄与することを目的としております。例年、この短い巻頭言では一つひとつ数えあげるのも困難なくらい、数多くのイベントやシンポジウムが開かれてきましたが、今年は、新型コロナウイルス禍のあおりを受け、実現できた企画は、きわめて限定的な数に留まりました。8月15日の終戦記念日には、わが国を代表する作家加賀乙彦氏の原作による朗読劇『永遠の都』を、youtube 配信いたしました。また、11月には、ヨーロッパに本拠地を置く劇団 White Horse Theatre によるリアルタイムのワークショップを開催しました。翌12月には、日本映画界を牽引する周防正行監督をお招きし、無声映画期の弁士を題材にした最新作『カツベン!』を中心に、監督としての経験をお話いただきました。また、コロナ禍の異色の企画としては、年度前半に開かれたクリエイティブウィークの一環の事業として、佐藤都喜子副センター長のイニシアティブによる、新一年生と学長との語り合いの場「アフタヌーン・トーク」を設けることができました。

以上、数はごく限られていますが、内容面ではいずれも十分に誇りうる充実した企画だったと自負するものです。それぞれのイベントにご参加下さいました方々に心より御礼申し上げますとともに、ご視聴・ご参加くださった皆様にも心より御礼申し上げます。また、本センターの研究紀要としての性格を加味した雑誌 Artes MUNDI(アルテス・ムンディ)も無事、刊行の運びとなり、今後もよりいっそう知的発信を強化していきたい考えです。皆さまの温かいご協力を賜れましたら幸いです。

2020 年度 活動一覽

WLAC 初の試みによる朗読劇 「永遠の都」オンライン配信

名古屋外国語大学ワールドリベラルアーツセンター (WLAC) では、2020年8月、わが国を代表する作家の一人加賀乙彦氏の大作『永遠の都』の朗読劇をオンライン (本学のYouTubeアカウント) にて配信した (配信期間は、終戦記念日にあたる8月15日から8月31日)。WLAC初の試みである。

今回の朗読劇を企画するにいたった理由の一つとして、同年1月、原作である『永遠の都』のロシア語訳が、セントペテルブルグの出版社から刊行されたことが挙げられる (刊行にあたって、本学副学長沼野充義教授の尽力があった)。また、二・二六事件から戦後にまたがる約10年間に日本が経験した災厄を叙事詩風につづったこの作品が、現代のウイズコロナ時代に生じた民族間、人間間の「差別」を予言していることもきっかけの一つとなった。そしてさらに、加賀氏と名古屋との深いご縁も今回の企画を後押しする強い動機となった。同氏は、名古屋の陸軍幼年学校に学び、そこで終戦を迎えているばかりか、昭和20年5月の名古屋城炎上を三日間にわたって目撃している (『永遠の都』にも言及がある)。

今回の朗読劇では、加賀氏の分身である小暮悠太と彼の父母の物語にスポットライトが当てられた。私個人の印象を述べれば、一度は自決まで覚悟した悠太が、名古屋から東京にもどり、時の権力者に対する怒りを爆発させ、無念の涙に暮れる場面が何より感動的だった。とりわけ悠太役山本芳樹さんの迫真の演技に賞賛の声が上がった。

オンライン配信は初めての経験だけに主催者として若干不安があったが、最終的にアクセス数1,932と予想以上の反響を得ることができた。今後、WLACでは、この新方式を活用し、さらに魅力的なプログラムを提供したい考えである。最後に、『永遠の都』の原作者加賀乙彦氏、台本執筆者である俳優の矢代朝子さん、俳優の笠原浩夫さん、山本芳樹さん、スタッフの小坂登起さん、また、本学のトーマス・ケニー准教授に対して心からのお礼を申し述べる。

(ワールドリベラルアーツセンターセンター長 亀山郁夫)



オンラインでのリアルタイム講演会 「周防監督と語る映画『カツベン!』」

2020年12月4日(金)、日本映画界を牽引する周防正行監督をお招きし、「周防監督と語る映画『カツベン!』」を開催した。

代表作『Shall we ダンス?』をはじめ、『シコふんじやった。』や『舞妓はレディ』などの生き生きとした若者たちの群像劇、刑事裁判を描く『それでもボクはやってない』など幅広いテーマを取り上げてきた周防監督。本講演では、最新作『カツベン!』(2019)を中心に、そのご経験をお話いただいた。学生・教職員・一般受講者の約150名が、ZOOMを利用してリアルタイムで参加した。

映画が「活動写真」とよばれ、映像に音声同期させる技術がまだなかった時代、無声映画期の日本では、映画の内容や台詞をスクリーンの脇で語る「活動写真弁士」が、映画スターに劣らぬ人気を誇っていた。周防監督の最新作『カツベン!』は、この活動写真弁士にあこがれる青年を主人公に、彼を取り巻くライバル弁士や、映画館主、楽士、警察、ギャングなど個性的なキャラクターが活躍するエンターテインメント満載の映画である。

講演の前半では、新しいメディアに出会った世界各地のひとびとがどのように初期の映画を楽しんだのか、『カツベン!』の背景となる歴史を語っていただいた。アメリカやフランスで開発され発展した装置や技法が、日本の伝統的な語り芸とむすびつき、多くの活動写真弁士たちが活躍していく黎明期の映画史を、監督自身の関心を織り交ぜた生き生きとした語り口で楽しんだ。

続いて、報告者が聞き手となり、映画のなかで無声映画を上映する場をいかによみがえらせたのかを伺った。『カツベン!』の貴重なメイキング映像などを紹介しながら、現在も活動を続けている弁士たちに協力を仰いだ演出の過程などが語られた。明治期から残る芝居小屋をロケ地として、実際に役者が弁士として映画を語る場面を演出する経験を通じて、無声映画が上映されていた空間がいかにか騒がしいものであったか実感するなど、監督自身にもさまざまな発見があったそうだ。

質疑応答では、参加者からの『カツベン!』題字に関する質問から「周防監督が弁士なら、どのような語り方をするか?」といったユニークなものまで、さまざまな話題が登場した。監督自身の映画に、現在活動している弁士たちに自由に語りをつけてもらったら面白い、といったスリリングなアイデアまでご披露いただいた。

誕生したばかりの新しいメディアがどのようなものであるのか、『カツベン!』が描いた時代にはまだ誰も知らず、「映画」とは何か皆が模索していたはずだ、という監督のお話は、われわれ自身の映像の楽しみ方や、映画の歴史と未来を考えるための新鮮な視点に満ちている。オンラインの画面越しにも参加者の拍手と知的興奮が確かに伝わる濃密な90分間となった。

(世界教養学科 白井史人)



周防監督と語る映画 『カツベン!』

1984年のデビュー以来、日本映画界を牽引する周防正行監督をお招きし、無声映画期の弁士を題材にした最新作『カツベン!』(2019)を中心に、監督としてのご経験をお話いただきます。生き生きとした若者たちの群像から、刑事裁判など幅広いテーマを取り上げてきた周防監督のお話を通じて、日本映画の歴史と未来を考えます。

2020年12月4日(金)
15:00~16:30

開催方法 オンライン(ZOOM)
参加者には事前に招待URLを送付いたします。

定員 学生:140名 一般:30名

対象 どなたでも参加いただけます(要申込、先着順)

開催 名古屋外国語大学現代国際学部
世界教養学部
名古屋外国語大学ワールドバラルアーツセンター共催

申し込み方法 申し込みはZOOMの招待URLからとなります。ZOOMのIDとパスワードは招待URLに記載されています。ZOOMのインストールはZOOMの公式サイトからダウンロードしてください。
<https://req.que.jp/wac/form/20201204>

定員 11月27日(金)17:00
定員になり次第申し込みを締め切ります。定員になり次第申し込みを締め切ります。

イベントの開催にあたって 本イベントはZOOMの招待URLから参加していただきます。ZOOMのインストールはZOOMの公式サイトからダウンロードしてください。ZOOMのインストールはZOOMの公式サイトからダウンロードしてください。ZOOMのインストールはZOOMの公式サイトからダウンロードしてください。ZOOMのインストールはZOOMの公式サイトからダウンロードしてください。

名古屋外国語大学ワールドバラルアーツセンター | Tel: 0561-75-2164(直通) | mail: wac_aj@nufs.ac.jp

©『カツベン!』製作委員会

WLAC 主催による1年生のための 「アフタヌーン・トーク」

入学以来、オンラインで学んでいる1年生の希望者を、亀山郁夫学長が「アフタヌーン・トーク」に招待した。1年生はいまだ大学生としての自身のアイデンティティや大学への帰属意識を醸成するまでに至っていないと思われる。そこで、ワールドリベラルアーツセンター（WLAC）は、1年生が登校するクリエイティブウィーク（創造的週間）の機会をとらえて、大学を自分の居場所として実感してもらう「アフタヌーン・トーク」を催した。10月に4回、12月に2回の計6回にわたり、総勢43名が参加した。

学生たちからは「学長は学生時代をどう過ごしたのか」「趣味は何か」といった学長個人に関することから、「大学生の時にしておくべきことは何か」「コロナ禍においてどのように学んだらよいのか」など学びに言及したものや、「オンライン授業はいつまで続くのか」「留学の今後の見通しは」といったような大学の今後の方向性に関することまで、質問は多岐にわたった。

亀山学長は自身の学生時代の体験を交えながら、「自分と向き合う時間がたっぷりある今だからこそ、自分に向き合い、自身の可能性をさぐってほしい」と学生に語りかけ

た。そのためには、「孤独を大事にしてほしい。孤独でいる時に、例えば、美術書を一冊でも良いから買って、毎日一枚ずつ絵を見る。すると、好きな絵、嫌いな絵が出てくる。その中で、なぜ好きか。なぜ嫌いかな。そこから、自分が見えてくる」と語った。また、目標として、「5つほどの「芸」を身に付ける努力をしてほしい」と述べた。

和やかな雰囲気の中、「これから歩む長い人生が常に青春であるためには、ドーバミンを生み出す喜びの源泉に触れていけるかどうかがかギとなる。皆さんの健闘を祈る」との亀山学長の激励の言葉で会は締めくくられた。

(ワールドリベラルアーツセンター副センター長
佐藤都喜子)



1年生対象

AFTERNOON TALK

～ 語らいの午後 ～

Oct. 5, 2020 - Dec. 03, 2020

CREATIVE WEEKに入学される1年生のみなさんを対象に、亀山学長自らがホストを務める「アフタヌーン・トーク」を開催します。亀山学長とじかにお話をされたい方は、こそってご応募ください。

※応募者多数の場合は申し訳ございませんが抽選とさせていただきます。

日時 所属の学科・専攻の各校日ごとに分かれています。ご自分の学科の日程でご応募ください。詳細はポータルまたは申込フォーマットでご確認ください。

場所 コミュニケーションプラザ2階（ランゲージラウンジ）

開催 名古屋外国語大学ワールドリベラルアーツセンター主催

対象 名古屋外国語大学の1年生

申込方法 右記のQRコードを携帯電話やスマートフォンで読み込んで頂くか、下記URL先のフォームから必要事項を入力・送信してください。締め切りは9月30日（水）です。
<https://req.qubo.jp/wlac/form/afternoontalk>

お問い合わせ先: ワールドリベラルアーツセンター
0561-75-2164 / wlac_gg@nufs.ac.jp

ホワイトホースシアターによる オンラインドラマワークショップ —イギリスと名古屋を繋いで—

ホワイトホースシアターは、ヨーロッパやアジアの国々を巡り、英語学習者を対象に公演をおこなう移動劇団である。本学では2016年の「ロミオとジュリエット」から毎年招聘しているが、2020年はコロナの影響で劇団はツアーをキャンセルし、オンラインのドラマワークショップに切り替えた。

劇団を招聘する本来の目的は、学生に演劇の楽しさを知ってもらうことである。画面を通してのワークショップがどれほどの臨場感をもたらすのか全くの未知数であったが、オンライン授業の毎日、英語のコミュニケーションを切望する学生は多いと考え、開催の運びとなった。インストラクターがEfon EvansとMark Woodhouseであることも大きな要因であった。二人は2017年「十二夜」で来日し、公演の素晴らしさもさることながら、学生たちにとってもフレンドリーに接してくれた。この二人ならきっと有意義なワークショップを提供してくれる、と確信できた。

密にならぬよう1グループは5~6人、1日2グループで二日間という日程にした。使用する教材は、劇団オリジナルのHonesty. AnnyとTimの姉弟が、バッグを盗まれたおばあさんを助けるためロンドンの街を駆け抜けていくというもので、イギリス独特の単語や言い回しに溢れる、楽しい作品である。

さて当日、日本時間で午後3時、イギリスは朝の6時から始まった。画面に現れた二人は「ロンドンはまだ真っ暗だ

よ」と言いながらも、にこやかで元気そうある。各種のアクティビティをこなし、メインのインプロ（即興）の時間となった。店のレジで、見知らぬ男が突然おばあさんのカバンを掴む、そして何が起きるか—その後を創作して、グループごとに発表するというものだ。話の流れも台詞も自分たちで創らなければならないので、皆真剣である。発表は隣り合う部屋をオンラインで繋ぎ、大きなスクリーンで共有した。学生らは、同じ題材でも全く違う展開となった他グループの発表を見て、お互いに大きな拍手があがった。

アンケートにて今回の感想を尋ねたところ、回答者全員が「また参加したい」と答えてくれたのは嬉しい結果であった。理由は色々であるが、特に「初対面の人と一緒に考えるのが楽しかった」、「演劇は人と人を繋ぐ可能性があると思った」、「観る側から演じる側になって、自分の英語力を客観視できた」などの感想は興味深い。演劇というツールを使って、今後、学科を繋いだ学びの場を設けることができるのではないか、と考える。

今回学生は劇を「観る側」から、「演じる側」となった。そのことが彼らに学びや気づきをもたらしたのであれば幸いです。

(現代英語学科 ムーディ美穂)



World Liberal Arts Center **WLAC**

ヨーロッパに本拠地を置く劇団 White Horse Theatreによる White Horse Theatre 2018 年より毎年本邦にて「Romeo and Juliet」、「A Midsummer Night's Dream」、「Macbeth」等の公演を行い、多くの観客を魅了してきました。

ホワイトホースシアターによるオンラインドラマワークショップ 要申し込み

English Drama Workshop

by White Horse Theatre

今回はNIFSの新しいスタジオE22教室とロンドンスタジオの2つを繋ぎ、リアルタイムでワークショップを行います。使用教材は「コミュニケーション」がテーマの演劇が、観る側から演じる側になって、自分の英語力を客観視できた。興味深い。演劇というツールを使って、今後、学科を繋いだ学びの場を設けることができるのではないか、と考える。

※参加費は無料です。但し、当日のワークショップ参加費がかかります。参加費は当日のワークショップ開始前までに必ずお支払いください。お支払い方法は、クレジットカード、現金、銀行振込です。

2020年 11月5日(日)、6日(金) 15:00~16:30

会場 E棟22教室
定員 各回15名
対象 本学学生および教職員
費用 英語
主催 現代英語学科、ワールドリベラルアーツセンター共催

講師 Efon Evans

14歳よりイギリスのTVドラマ出演して来ました。現在は Bath University で演劇を専攻しています。White Horse Theatre 一員として、今年も本邦に公演に来日し、NIFSでは2017、2018年の公演に参加し、多くの観客を魅了しました。

申し込み方法
参加費は無料です。但し、当日のワークショップ参加費がかかります。参加費は当日のワークショップ開始前までに必ずお支払いください。お支払い方法は、クレジットカード、現金、銀行振込です。お申し込みは、https://req.qube.jp/wlac/form/18_19maworkshop

名古海外国語大学
ワールドリベラルアーツセンター
Tel: 0561-75-2164 (直通) Mail: wfac.p@nifs.ac.jp

ワールドリベラルアーツセンター 活動の軌跡

2015年度	6月23日(火)	ワールドリベラルアーツセンター発足記念イベント
	9月28日(月)	自ずから到来するもの
	10月17日(土)	国際シンポジウム 日中大学生討論会
	10月20日(火)	フランス語学科主催講演会 生命力の移動 —ボードレールと分人主義—
	10月31日(土)	第9回英語教育学科主催講演会 モンゴル への発達障害児支援から学ぶ
	11月2日(月)	フランス語学科共催講演会 ビエール・ルメ ートル氏の講演および中村文則氏との公開対談
	1月9日(土)	中東激動と日本の関わり
	2月18日(木)	裁判員裁判時代の法廷通訳人
2016年度	4月18日(月)	英語ドラマワークショップ2
	5月14日(土)	国際医療通訳シンポジウム&ワークショップ
	6月3日(金)	男装の女性作家ジョルジュ・サンド —その生涯と現代性—
	7月16日(土)	日本の領土問題を考えるカギ〜サンフランシスコ 体制と尖閣・竹島・北方領土:過去、現在・未来
	9月18日(日)	キャンパスのグローバル化を目指して:グローバ ル人材育成から得られた教訓
	10月4日(火)	世界を駆け巡る 〜国際協力の現場からの発信〜
	10月15日(土)	ホワイトホースシアター来日公演 ロミオとジュリエット
	10月20日(木)	名古屋外国語大学 フランス語学科主催 講演会2016
	11月21日(月)	名古屋外国語大学 フランス語学科主催 講演 会2016 若者文学におけるフィクションと現実
	12月3日(土)	黙過の想像力 ドストエフスキーとフランス文学
	12月11日(日)	ドミートリー・ショスタコーヴィチ生誕110周年記 念シンポジウム&コンサート 甦えるショスタコー ヴィチ
	12月20日(火)	2016年の世界を旅する 今年の重大ニュース を振り返って
	12月22日(木)	第1回 国際教養学科主催 国際教養セミナー
	1月7日	英語教育と文学
	1月12日(木)	ストリートチルドレンからギャングまで
	2月20日(月)	多文化共生社会と難民問題
2017年度	5月18日(木)	「ポスト・エグゼグティズムにおける物語の転覆」
	5月19日(金)	「新しい外国語大学の挑戦」
	6月15日(木)	「The Field of Sound」講演会
	6月17日(土)	「第三回 日中大学生討論会」
	6月27日(火)	「日系アメリカ人の第二次世界大戦の経験:帰 米の物語」

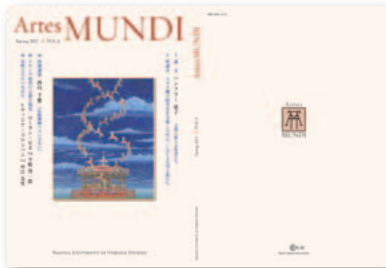
	6月28日(水)	「Glenn M. Ray Special Concert in NUFS」
	7月5日(水)	「映画を読む—ビクトル・エリセの詩学を語 る—」
	10月6日(金)	「ホワイトホースシアター公演 シェイクスピア 『十二夜』」
	10月11日(水)	「混合体としての<アメリカス>へ」
	11月1日(水)	「『ボー・ジャングルを待ちながら』—究極の愛と 風変わりな家族」
	11月1日(水)～ 8日(水)	写真展
	11月2日(木)	「イガイなイラク」講演会
	11月8日(水)	「アイルランドの今」
	11月9日(木)	「言語・文化を通じた社会の融合」
	11月16日(木)	「アフリカ研究の第一人者が語るアフリカの 食」
	11月25日(土)	「津田仙・初・梅子を語る」
	12月11日(月)	「先住民族としてのアイヌの文化と権利」
	10月4日、18日、 11月1日、15日、 29日、12月13日 (隔週水曜日)	「ランチタイム・ピアノコンサート」
	12月16日(土)	「オーラルコミュニケーションフェスティバル」
	1月27日(土)	「村上春樹とカズオ・イシグロ」
	3月26日(月)	「中国の日本語教育の現状及び通訳・同時通 訳の養成について」
2018年度	4月20日(金)	「能という演劇」
	5月29日(火)	「異文化は発想の宝庫 異なる地理・時間・ 意識を漫画にする」
	6月5日(火)	「フランス音楽の歎び—ドビュッシー没後100 年を超えて—」
	6月12日(火)	「アンリ・マチス —二つの窓をめぐる物語—」
	6月14日(木)	「翻訳せずにはいられない —小説訳して30年」
	6月20日、27日 (水)	「ランチタイム ピアノコンサート」
	6月21日(木)	外交講演会「ゴルゴ13とサッカーがもたらす安 全と平和 —伝わる日本の外交力—」
	6月27日(水)	世界の文豪シリーズ 第1回「ナボコフの『絶 望』とダブル・ワールド」
	6月30日(土)	「Sharing Stories」
	7月3日(火)	「食と文化の世界地図」
	7月17日(火)	現代狂言朗読「大猫又狩騒動」
	8月22日(水)	新学習指導要領対応 教員応援ワークショップ
	9月8日(土)	グローバルビジネス学科主催 ビジネス講演会

9月28日(金)	「ゴリラから学んだ人間社会の由来」	7月24日(水)	講演会 WLAC Premium Cinema Talk シリーズNo.2 映像表現としての「黙過」イングマール・ベルイマン「処女の泉」		
10月5日(金)	シェイクスピア A Midsummer Night's Dream	8月27日(火)	ワークショップ「新学習指導要領対応 教員応援 英語ワークショップ」		
10月20日(土)	思考力育成と言語教育	9月28日(土)	あいちトリエンナーレ2019 舞台芸術公募プログラム「サルタン王の物語 ～熊ん蜂が飛ぶところ～」		
10月24日(水)	世界の文豪シリーズ 第2回「ディケンズの『大いなる遺産』」	10月2日(水)	公演 ホワイトホースシアター公演「マクベス」		
10月26日(金)	プレシンポジウム「カタストロフィの想像力とロシア文化」	10月4日(金)	公演「伝統舞踊へのいざない」		
10月29日(月)	映像翻訳の醍醐味と課題～映画字幕とAI翻訳	10月17日(木)	講演会「アフリカで起業しませんか?学びませんか?」		
11月14日(水)、12月5日(水)	ランチタイム・ピアノコンサート	10月23日(水)	WLAC Premium Cinema Talk シリーズ No.3 音が「視(み)せる」映画 無声映画、シェーンベルク、坂本龍一		
11月15日(木)	『ヨーゼフ・メンケレの逃亡』フランス人作家、オリヴィエ・ゲーゼ講演会	10月25日(金)	講演会「中国の改革開放の原点と日本の協力」		
11月17日(土)、11月18日(日)	国際シンポジウム ポーランドと日本における第二次世界大戦の記憶	10月30日(水)	コンサート「ランチタイムピアノコンサート」		
11月28日(水)	世界の文豪シリーズ 第3回 プルーストの『失われた時を求めて』	11月5日(火)	講演会 多文化社会における「人間の尊厳」概念		
12月11日(火)	中国の交通 インフラストラクチャー整備	11月11日(月)	講演会・公開対話「カメル・ダウードと李琴峰、外国語で表現する現代作家を招いて」		
12月12日(水)	世界の文豪シリーズ 第4回 フォークナーの『行け、モーセ』一語りの万華鏡、増殖する＜私＞	11月11日(月)	講演会「アフガニスタン寺子屋の現状と課題」		
12月15日(土)	第3回 国際教養セミナー	11月16日(土)	名古屋外国語大学出版会・ワールドリベラルアーツセンター設立5周年記念イベント「本の未来・本の魅力」		
1月7日(月)	世界の文豪シリーズ 第5回ガルシア=マルケスの『予告された殺人の記録』	11月25日(月)	講演会「ディケンズのことばを読むおもしろさ」		
1月7日(月)	ギターで語るラテンの情熱※世界の文豪シリーズ5 同日開催	11月27日(水)	WLAC Premium Cinema Talk シリーズ No.4 「イタリア映画の時代 ースペクタクル史劇とネオレアリズモ」		
1月12日(土)	英語教員ワークショップ From the Acquisition of Knowledge and Skills to their Application in Communicative Activities	11月27日(水)	講演会「オルガ・トルチュクの文学世界」		
1月26日(土)	基調講演 その先のAI人工知能に意識をもたせることはできるか	12月5日(木)	講演会「大人になるためのリベラルアーツ」		
1月26日(土)	知の理論をひもとく(Unpacking TOK)ワークショップ第6回	12月11日(水)	講演会「躍動するユーラシアの国、カザフスタン」		
2018年10月～2019年1月	月間イベント 世界言語12の燦めき Brilliance of World Language 12	12月13日(金)	講演会「「逆境力」を考える」		
2月9日(土)	シンポジウム これからの英語教育	12月14日(土)	ワークショップ「The Effects of Language and Psychology in the Learning of English」		
2月23日(土)	講演・コンサート・シンポジウム 脳と言語	1月29日(水)	講演会「なぜゴダールは難しいのか?」		
3月21日(木・祝)	シンポジウム ポーランド文学の多様性——レム、シュルツ、フォーゲル、工藤幸雄	2月20日(木)	ワークショップ「『カラマゾフの兄弟』の世界性」		
2019年度	5月23日(木)	講演会「読むこと 書くこと 訳すこと」パネル展示	2020年度	8月15日(土)～8月31日(金)	オンライン配信 加賀乙彦の「戦争」朗読劇『永遠の都』
	5月27日(月)～6月8日(土)	講演会 英字新聞が伝えた「日本」の近現代		11月5日(木)、11月6日(金)	「English Drama Workshop by White Horse Theatre」
	6月26日(水)	シンポジウム「私の＜世界＞の映画ー映画体験とは何か」		10月5日(月)～12月3日(木)	「アフタヌーン・トーク(語らいの午後)」
	6月28日(金)	対談「私の相撲人生」		12月4日(金)	オンライン講演会 「周防監督と語る映画『カソベン!』」
	7月9日(火)	講演会「これから女子の生きる道」			

発行冊子

Artes MUNDI (アルテス・ムンディ)

(※ Artes MUNDI (アルテス・ムンディ) とは、ラテン語で「世界の技芸 (ぎげい)」のことをいいます。)



Artes MUNDI 第6号は、コロナ禍における文化と教育の現状をめぐる二つの座談会を中心に編むことになった。同じコロナ禍によってワールドリベラルアーツセンターのイベント事業が数的にきわめて限られたものであったことから、講演会等の報告としては、2月28日にオンラインにて行われたドストエフスキー生誕200年のシンポジウム（日本ドストエフスキー協会協力）より、亀山郁夫の基調報告を掲載することとした。今号も、前号と変わらず、本学の教員による論文エッセー、書評を多数掲載することができた。また、一般の読者にとってはお楽しみのコラムは、「私の『世界一』の映画」のもと、昨年同様、ほぼ30のエッセーを頂くことができた。来月号では、さらに多くの先生方のご寄稿を頂くことができれば、と念じている。全体の編集は、亀山郁夫が担当した。なお、前号より名古屋学芸大学の水谷誠孝先生に表紙のイラストをお願いしているが、今年もまた素晴らしい作品をご提供いただいた。記してお礼を申し上げたい。

【目次】

特別講演
座談会
論文
特別掲載
評論
講演
テーマ書評 「コロナ時代を考える」
コラム 「私の『世界一』の映画」
エッセイ 「教師と学生を結ぶ」
書評
著者インタビュー

から、講演会等の報告としては、2月28日にオンラインにて行われたドストエフスキー生誕200年のシンポジウム（日本ドストエフスキー協会協力）より、亀山郁夫の基調報告を掲載することとした。今号も、前号と変わらず、本学の教員による論文エッセー、書評を多数掲載することができた。また、一般の読者にとってはお楽しみのコラムは、「私の『世界一』の映画」のもと、昨年同様、ほぼ30のエッセーを頂くことができた。来月号では、さらに多くの先生方のご寄稿を頂くことができれば、と念じている。全体の編集は、亀山郁夫が担当した。なお、前号より名古屋学芸大学の水谷誠孝先生に表紙のイラストをお願いしているが、今年もまた素晴らしい作品をご提供いただいた。記してお礼を申し上げたい。

編 集 後 記

コロナ禍がきっかけとなり、WLACは、朗読劇、ドラマワークショップ、並びに講演会をオンライン配信するという新たな試みに挑みました。その結果、オンラインであっても、魅力的なプログラム配信ができたことを嬉しく存じます。このような新たなスタイルによるイベントの実施は、今後のWLACの活動の拡がりを予期させるものと言えるでしょう。その一方で、入学して以来オンライン授業を受講している1年生の中から希望者を迎えて、対面による学長との「アフタヌーン・トーク」も実施しました。学長の趣味や好きな食べ物から始まり、学長がどのような学生生活を過ごされたのかといったことやコロナ禍で今何を考えていらっしゃるのかといったことまで、この機会でないとお伺いできないお話をたくさん聞くことができました。お互いの表情や動きを見ながらの対話は、和気あいあいとした雰囲気を出し、両者間の密なコミュニケーションを実現することができたと自負しています。

このように、時代と連動しながら臨機応変さも兼ね備えた姿へと成長するWLACを実感した一年でありました。

(ワールドリベラルアーツセンター副センター長 佐藤都喜子)

運営者名簿

名古屋外国語大学ワールドリベラルアーツセンター

センター長	亀山郁夫 (学長)
副センター長	佐藤都喜子 (副学長・国際教養学科教授)
運営補佐	梅垣昌子 (英米語学科教授)
外国語学部担当幹事	甲斐清高 (英米語学科教授)
	小山美沙子 (フランス語学科教授)
現代国際学部担当幹事	佐藤雄大 (現代英語学科教授)
	鶴本花織 (国際教養学科准教授)
世界共生学部担当幹事	地田徹朗 (世界共生学科准教授)
世界教養学部担当幹事	白井史人 (世界教養学科講師)
	宮本真有 (国際日本学科助教)

顧問

副学長	高梨芳郎
〃	佐藤都喜子
〃	沼野充義
〃	恒川孝司 (常務理事・法人事務局長・名古屋学芸大学副学長)

事務局

太田恵雄 (事務局長)
後藤隆文 (庶務部長)
安江沙恵

名古屋外国語大学 ワールドリベラルアーツセンター

〒470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山57
電話：0561-74-1111 (代表) 0561-75-2164 (直通)
Mail: wlac_gg@nufs.ac.jp